



武道傳
木記
五

特別
~13
4147
5



113
447
5

武道傳來記

續四歌付

目錄

卷五

才一

枕小殘糸茶毒くまのりちが

法師ほうしひひくく小坊こぼうのの賦ふ乃の中ちゆう

才二

吟味ぎんみ冬ふゆ奥おく鴻こう若わ袴はかま

志し親ちか地ぢと書かき並なら小こ志し乃の中ちゆう

武道 卷五

57-2514

才三

不断ふだん小こ心こころ燈とう乃の早はや馬ば

かぎはれ中に清春出さる

才四

火ひ煙けむり色いろ安やす行ゆき也や足あし

神波は我園の事



才一

枕まくら小こ殘のこ糸いと茶ちや毒どく也や

後柏原院大永乃法大和乃武家より都乃高家の
市入小島女とて世給ひ多に直年十六乃表も
秋かき月小の花小命一そ家乃風あれいそ
入まにそ世給ひ琴乃雅の酒場乃種とありそ枕二
の乃侍はは癒れそあひ之髪小冠色も給ひゆ
自らし小礼もそ教振あり小誓り多し直柳色も
あそ風はを乃乃子使、裏服映り山乃去とありそ
乃歌記各にまらりそは作君れ直乃世もそ水離乃
愁歌外よりなるあいろもそ世にるあひいれは
あもゆそあふよ故の涙乃糸糸志あしそ龍田れ山色
小のあろし白ひの神に使に直目れ何あか所うはれ
と心をそあろそ思髪乃おしれはる直の直人乃

為之れい出象ありてなりと南部乃法意と小入と仙の乃
ひく一あり一ありふいれはよりん境やませぬい處さ
由形れまきと胸のこませ口中さけと軟と寝た也
結のこひ月と糸と動く是と大般極中結記海より記法
家の中と行のこい乃ゆ命と糸のなりぬもその結
去極のこい一なり一結のこい結記各結乃乃因後也時出
以象と坪息病入町経名も川と玄方と因乃とく結
出と象のこい中病家に入由肺と候也とく結廣間に
度とく由極極中病作と玄方とく小と極乃而るは
小極方付のこいとく結のこい此結上と糸相合とく
と月と目樹根と家と出と有と學扁結と再來のこい
谷と結と一なり一可れ極感と思入結と由と糸小結とく
人とのりり一思結と玄方現とありて

筆談云脉來數大此陰虛火動之症也按古之
賢指火而為諸疾之原所以然者火妄動則燎物
疾之象也人能修道而清順則病何由生哉夫若
人鮮世接物觸事之間情欲之火無時而不起々
則得疾其指火而諸疾之為原豈不宜乎經曰一
水不勝二火一水者腎也二火者君火相火也五
行各一其性惟火有二而巳陽常有餘陰常不足之
理昭晰也然者參芪其溫藥所深禁也速非投於
滋陰降火之劑難救命矣如緩治則悔噬臍有何事
實小國家毛素尾吾庫由極乃由病中とありて
むり代運の支ぬたにお浩りありり乃案入るもや
換川月巻紙とありて出是也由肺と後書付指しけり

百道 卷五

見之醫乃其すつりたぐひ小志魂とみぐにぐ可に
 再談云愚按診脈無定體或小或緩或沉或數變
 動不常夫脈不常血氣虛也譬之虛偽人朝更夕
 改無定體且數大之脈來全不常故非火動之症
 唯考脈症屬虛而氣虛為重也此金極似火之病
 非參芪其溫之輩難治曰陽生陰長之格言今此
 時也何可畏於不偏不倚中和之君藥哉蓋痰中
 帶血者由脾傷不能裹血也舌生白胎者胃中有
 寒丹田有熱也夜不寐者由于盜母氣心虛而神
 不安也胸痛噯氣者氣虛不能健運故鬱於中而
 噯氣或滯於上則為胸痛以上之諸症無疑虛也
 故以補氣藥為主加用安心滋補消食之劑則諸

症自退矣且不知元則害承廼制之旨誤為陰虛
 火動而用寒涼降火之藥則聲啞喉痛上喘下泄
 之變症增劇扁術亦可難起乎
 玄芳周益友人配劑亦多矣の醫者中乃にて祥
 小味とあるは月益種方付て理に徹しつる也
 小月心られた坪是花人か小智く丸持ねれい推り陰
 乃とくもく玄芳の薬は熱り二三日あけなりし小是
 見立よひと門と表とど七目とく乃曜に死去あそいれ
 上よりあく乃熱にやのめ。此死骸の由を云小は世
 ちいさりく松の樹とありて年法つらりん中
 後忘れど十七人点あひ下髪とかり切替皆雲海の
 神に留り死る門のあそひ向其死に花山乃樹とりし世



巻五

小倉の根君乃後吊をせ常念公小言ぬ堂の難たりの
乃の上せ方れはりましくは度去芳業甚ひそ程とあは
命共ひるく惟云左少くはうこ鼻そく程めく由耳りま
京川去芳方とせれ少くは由信出させれ信に妻子らつ
河列國分の里小直進多信流人是と腹立しては重なる
う向ひは西の醫師の住居信法なめく横川用是退進
へ直進とせ信ととあはれ来とまのしじふ小成肉とは信
家用是信と程とてなむめく教程の後の骨がく是も
同味之痛れ里小直進不自由信のれ来書信にまがは
けの東尾兵衛守村と里小人等一用是信信と信
一急安ん味にのり信へは入ぬの程れ是也と信
兵衛と信所西の合世打くか所む人ぬは初發た入
肩の袖た力信めく振打ぬ死切附とめくかからぬ

才坪兵衛七く付後より下へおの愛徒とての之脇後
信のぬと又突か所と兵衛入骨より式尺をより切所
か所ぬぬは大海よりより持た所力と振付給へ虎七
と信くあはれが太腹にましく而産の命と果ぬ是と
く兵衛打突の脇指振と腹に信りまると虎七とて
信く小首打とく信よりぬぬ直進をあるの東も板義并
信小忠ひぬ兵衛屋敷より信のぬ久中野武太是まを
け信進乃信信をこれ信の東の越乃山乃あまこはれ
先まぬりくは事信ぬとるは兵衛名徳と信の十の年
世信根を信小細ましく東尾美肉とつるはあやうと
大進もはく信信ましくはれ信多振のまを信
まねとくいま七歳ぬれば欲付出の職とて信の武太是
志めくはれ信は信の信の信の信の信の信の信の信の

分二 吟味を奥流に待

青月惟赤袖とまはる清夕流らる村樹小暮色清と
系麻梅ゆとくか所跡も色もささるれり侍乃たう
風れとけいこも色つひく清くかこひの所男の村と
こつろ舟波の舟舟にあらるれたあを船次よあめり
旅情小生れ村安念やも首の梅前よこよ百の梅目色入お
らびとあひはと梅とららけあぬ乃親父系麻肉花玉の
まの賦あれの筆をたかひとく見んとのまうり
せられ清とさうりこいさしたはらる福あくさたゆ
るふ一念と枕と年月と送りぬ室に圓れちあるあ
時梅とゆと只一月とんらるる頼小ら出と所へ中位下
さるる所と肉流かこけあく清流とさくゆりげ梅とゆ
ふらぬらこつ小ゆれさあくさのあくとく長とつ

年節と終るゆとけいこもささるれり侍乃たう
一なりせひらせられ侍らるる清用とらるる村と
まの乃乃麻大ゆの恨りこつ別と梅とくさめ月より
福あつひのめと親父より外よ出と親父是とまの毒
小梅とと慰むらに親あつ別るあ麻肉おつらこは梅と
次ととつと世梅病氣れよとつらるる清とさくゆり
とをせ流のそ後とあ勤り十念新六よ市雑後あり梅と
ゆ今よ本版せとわと回きとれよ小新六肉と梅とゆ小丸
ふあくとあつらるるれらるるのよ自れあつらと志流
とれとつけありとつらとつらとつらとつらとつらとつら
とれとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら
入はれ小舟とつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら
風情とつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら

面自りお何まり首のゆりぬ。そは終にらけ書いあがゆお
 ぼ三人づつ借りの甲と破るもの拍系な奥の村まで千両あり
 ちのりも三人の内式人のゆりぬ。そは終にらけ書いあがゆお
 着る千両ありあつりて勤しん元よりけは目と信付れらる
 の何ぞを個法と仕出させまじ法をいぬぬとて一とたさる
 きたけ男よりけは目と信付れらる。そは終にらけ書いあがゆお
 まさりなまらるるつひくお色かんおとされらるるちのり
 お飯の酒を座とまら。時れ推しゆくとおが婿お決り中
 頭とつとめと幸に法をいぬぬとて一とたさる。そは終にらけ書いあがゆお
 とてゆりぬとつひくお色かんおとされらるるちのり
 ちのりぬる時夜書け法を千両持と腰とちのりぬるちのり
 竊いそと盗くと足とちのりぬるちのりぬるちのりぬるちのり
 御ゆりてらるるに持め。お書いあがゆおと寝てく若

ちのりぬる時夜書け法を千両持と腰とちのりぬるちのり
 竊いそと盗くと足とちのりぬるちのりぬるちのりぬるちのり
 御ゆりてらるるに持め。お書いあがゆおと寝てく若
 ちのりぬる時夜書け法を千両持と腰とちのりぬるちのり
 竊いそと盗くと足とちのりぬるちのりぬるちのりぬるちのり
 御ゆりてらるるに持め。お書いあがゆおと寝てく若
 ちのりぬる時夜書け法を千両持と腰とちのりぬるちのり
 竊いそと盗くと足とちのりぬるちのりぬるちのりぬるちのり
 御ゆりてらるるに持め。お書いあがゆおと寝てく若

おわかれのいははぐひのたつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと

とどろけのたつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと
 ちたればおほくもてくまひのつらふありとけしきまづいふと

叔十人市々醫局坂川玄素市使名今乃市海甲斐品
 の然とつらつたれ多く内流毛以加あれた使令とあり梅々
 明と送り叔市あふ出さ所今今まて市あふ再出さ所市不
 足りむしくわりくされ色振子と空にあからけにけらるれ
 門く今市命の不義乃料あからけくと新敷敷一
 市これがむといのりやさ所ゆのいあま。かみおまふとと
 一とゆらとまよりも門とあひあがりる色にむびん。是
 の市をこたえしど今市命と拙者義さうしくお振のゆ
 よあことどか振ある義市例の傷人あそと後このあに
 休云Pとさ所れそ市度あべ一とゆと今市の下あり
 新六兵出く何と市例乃傷人との誰とさほどをよとを
 方と今市命志はれゆい市中あからけらぬおよしく某
 Pと今市生もあまあるはよりつられが所はとといはな

市あともよかぬそれと傷人といふとさうとく何
 ごとひとととああぬぬ人け市あからけとそれとり
 くと梅々ゆりつるあ人借れの別義あ何後またを
 小食むゆなうれと奥小入せさひくると梅々ゆ出らるれ
 ゆり梅也せひかにけ先是新市があせる市と今市命あ
 とくせ振つてやしくとあられさ所ゆ乃かあさる海に
 くれあがりぬと海くと書直とる名書三出と新市海
 らん法ゆけし所小義養乃段柁灯是新市と何とゆけ
 振合せと打一ち方小切外あ憲之人也適さる切例一
 律坊小高道あ今ハ是とと新市が死體に勝りけ
 ありつと市例の切後一。つりう肩搭おしと海ぬ。れ
 大カ音を和のぬとらにけしるはやあ方りるられと
 一通乃書管あり振さるるに。様もそい一通おおひく



おりりてはあまうくくPわけ先きかみ海なるなよ
 民の東武おしと淡草乃ち所ちく小備はあ
 て門柱に棧井民の筆をよ法札して菱垣れりあ
 風情の西りく月とく。登の書れと角れ吹込り
 いらの世風がしらにのまの一目以書一極奥の程
 秋の香れおれ一不菊色霜指おらに法ひり乃
 息女十一あて琴乃曲とれく好給へ母の是小和
 時分とくひくもんあかて法ひぬけ并面白半
 女乃若くくけりく板戸法に抱き座まて
 ちり先と愛おれとる。今門あそ親れ款付と
 肌力指くけけの民終るれつとそそ女あや肉
 一とめ。あそれ命の愛れれりゆれあそとやゆ
 女の女と女とと長乃乃籍のく門は女あハ長月

女目れ書お物り月おれあうくと面紅色んりり
 おとくくま一と男とくあそらら男小角前髪
 能枝女切造ひ女程おけつありつ一命女小極
 心なる信あり民終肉女よ之流先小力た後つ
 心若れとかわりと脇と松せり御に麻利支天と思
 うと。ピけ若うらに洪山の便りと女枝女よん
 進一男乃脇腹切付らうとくけ終に打外そら
 高股あくあやまり男と極と肉後肩にけて肉入
 民終の海越よ身あて角お髪ととと振くと下知
 小力踏とく切付能かのく首と打ば勢おおれく
 あげつと今程りの男退付打とめ。武人あぐと淡
 女や款の妙く打とと若とけあふ時民終廣
 今と先は法のそとと後橋子と若とく小女入礼

ては度乃首尾偏より氣ゆあり。殊更内方松井市御記にて
頼ひりす。にび女中分派をげし。後一と市熱節より一と前
色と源とにが。是のり佐州松井より一と念店をあるとP
乃娘。松平の天皇世をあるとP。て月。家中。中。小。松。平。を
年。以。お。小。平。在。松。平。の。年。を。あ。け。女。と。の。り。ひ。P。未。十。日。色。を。あ。け
中。小。松。平。松。平。次。と。P。未。在。松。平。と。是。福。屋。と。打。挂。玉。取。と
立。付。た。松。平。男。の。の。あ。れ。外。お。ん。れ。む。市。熱。P。傳。三。年。あ。り。家
派。の。り。や。う。く。し。程。付。出。と。首。尾。中。國。の。場。毫。の。松。平。小
松。平。次。が。首。あり。と。云。お。に。佐。ひ。と。念。と。松。平。と。結。さ。む。
洛。り。是。の。り。年。を。あ。け。松。平。色。と。あ。り。P。あり。是。と。追。付。市。熱。よ
と。一。割。P。あり。と。ま。に。成。ま。れ。つ。り。ひ。く。松。平。小。平。の。り。さ。り。
ど。り。答。を。頼。ひ。り。小。平。の。り。と。民。部。門。と。り。し。て。市。上。松。平。の
松。平。合。と。市。熱。玉。と。松。平。あり。松。平。な。り。れ。り。女。中。か。と。さ。り。

一に松平がゆたき力用技を伝ふ。中。ま。の。り。と。め。と。市。上。松。平。と。
市。熱。の。後。目。に。あ。り。の。り。と。是。と。松。平。乃。乃。松。平。の。り。て。別。ね。松。平。又
佐。松。平。の。り。と。一。松。平。判。を。ある。松。平。の。り。松。平。の。り。と。市。熱。P。傳。十。三
よ。一。子。判。之。松。平。同。妻。と。ある。と。ま。に。松。平。の。り。と。市。熱。P。傳。十。三
乃。ま。に。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。
人。の。り。松。平。の。り。乃。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。
市。熱。玉。の。り。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。
二人が妻色をうらまひ。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。
市。熱。玉。を。う。ら。ま。ひ。り。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。
け。り。す。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。
志。乃。女。の。り。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。
子。判。之。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。
乃。中。の。り。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。松。平。の。り。と。市。熱。玉。と。

一言に誓と切替く。いまは合れうり小出島あり。ひね。何り世に姑々ぬはう。つねれと事。けつさのりか。つり記。東に判ちあつ。今りと心。ひきめ。得か。つねぬと。まや。り。た。ま。立。と。あ。い。あ。を。是。ぞ。佛。乃。降。去。等。以。行。も。法。は。座。あり。弟。の。ひ。ふ。子。六。指。あ。い。ふ。あ。人。を。と。め。らん。と。う。と。親。念。て。び。ざ。り。乃。ま。い。ま。と。地。合。も。身。と。り。の。あ。ま。と。あ。の。川。よ。切。付。お。徳。と。の。ま。ぬ。れ。魂。を。も。す。何。し。糖。と。あ。り。多。海。末。乃。世。れ。と。あ。い。ど。う。大。聖。尊。を。あ。つ。け。る。の。志。な。る。く。乃。修。護。り。一。礼。は。来。り。た。う。と。あ。い。と。は。是。と。難。記。を。依。と。為。く。必。す。と。あ。て。何。人。と。違。ひ。生。國。に。ゆ。り。二人。乃。法。界。の。善。光。と。れ。行。山。の。弟。等。座。と。し。び。り。と。し。た。り。ま。ま。の。善。之。悪。の。ま。あ。ま。の。く。ま。ん。の。後。法。界。を。よ。也。一。常。人。の。り。と。八。百。を。と。も。め。ん。積。丹。を。水。と。我。り。カ。り。を。也。

第四

大蛇とありくは是乃也

大蛇。初より。ま。く。國。の。海。と。も。あ。が。り。目。か。乃。白。山。あ。る。い。も。あ。れ。て。橋。乃。渡。舟。漕。海。の。く。遠。く。乃。出。と。れ。い。く。び。は。此。ま。さ。さ。小。波。あ。と。え。り。あ。い。く。市。中。の。山。居。と。あ。る。や。ひ。の。り。一。友。朋。友。を。入。格。の。い。わ。れ。あ。が。れ。と。事。矣。小。れ。と。あ。も。耳。到。一。所。い。と。や。い。あ。と。く。何。と。は。物。れ。出。る。首。柄。は。と。や。と。と。う。り。ゆ。その。と。と。い。の。先。二。具。を。と。り。と。移。結。か。ら。れ。惟。子。と。打。盤。火。燧。を。お。く。追。お。く。度。成。た。あ。り。り。一。塵。微。塵。あ。と。云。程。た。る。お。を。流。く。目。に。か。ぬ。唇。色。情。い。ま。ま。の。の。六。七。十。も。と。む。は。より。遠。る。海。風。色。を。れ。か。と。お。ど。ら。れ。行。濁。よ。の。く。何。男。色。は。ま。も。一。欄。出。天。井。は。扇。乃。嘘。と。も。雷。は。は。ら。の。心。の。ち。難。り。る。屋。の。と。揚。め。が。わ。り。と。や。り。小。舟。へ。色。と。や。九。千。七。八。よ。か。り。つ。め。り。信。時。が。あ。れ。と。と。逢。へ。く。人。二。西。の。鼻。と。



是と云く拙者も人乃迷惑おぼゆる。それの惟く乃批判して
 中まし一との耐藤村三九郎とのつる男不あさり何れ巨
 あいびりし巨いひはれささ中持りどやとのひ一おそれ
 何のあしんとのお女と愛とあり。所感状のものとをひわ
 りして唯と是の幸乃五法出外も腹痛をの拙者あつがけ
 るよ付く一一分なぬ色けは座のわり。その中けおあ
 しく巨色伝さるるとおまの結とるたと存するおは自
 分は出さるく中却一。所志のるるをれを連巨伝られま
 し。どうくお不推めぐ。救くおまのれとあさと結とるひ
 けられく三九郎色ひわれお。こまとまをせせむひあ
 ともつづひ。この所城肉番おり。流骨と物末と極めそれ
 のれ久著中持りて。此合目打作乃。所程さるる。たの
 心人ののれぬおさくけつ。け。所は三九郎方おはゆた。力

ありく支方三十二人切合付々々又八人為太東門を
三九節同様八節と付ありは兼もよと員を合な島瀬出
島の御座の切れ和半波志出の以三三人兼殿をを人か
つ建も場より盡の進々傳を極三九節子林八節中
三八十二支ふあり志が島嶼乃時節十元一里ふ好ひ多く
ひより今もせえん自伝時の中はあへん我を傳ふのこ
ごてしと三九節擲芝村湖の小島に付付られ支人ま
あけまより三九節擲芝村湖の小島に付付られ支人ま
通に傳座の者とりてある村の清あり乃龍事の進ます
飾ひわりとの終に進りありはる三ヶ月是ともめ發
より接れりり物うに我末毎小室也と人乃流と取評談
乃物と取ありあうとく生たを是乃評と安と好はるく人
りあことごとくむ色先をさるふ又乃るもとむの半邊を結

つと安の節一にけむるの皆も節ありく山城乃國小治り
するに今宵れらつとあもりあうありの節一にありと取
事と付く縁物や内決をいりげ小鳥とよとそれら
平浪志出ありはるもむもくするに三八節の執りし力
おれのる伝遊今もつととありと各々の清くはとあも
あひされの打に及びとぬる志出の傳方小忠ひ居りや
りもとあへせ清つととる傳人をもあのうらぬらり勢小
ひ志後志出のうとむのひありれはは高のふ社流派
つと色ゆつとつとまんる志出の今もあれ系大の軍戸川
交えとつと學志出の志出のりて用ひありくはせも大
の報りともんは志出の平流と志出とくとも色出へや
つとひももせと堰川とよとあはれい二系及指とを志出
つとけと打射せあ人乃志出の志出とけとめりぬ

